

新・農業経営者ルポ／第223回

離島でメシが食えれば本当のプロ

離島でメシが食えれば本当のプロ

府県での馬鈴薯の生産といえば、低効率の問題が付いて回る。ただ、物流からすれば、北海道より地の利があるケースが多い。その府県でも離島となれば話が変わってくる。沖縄本島に近い鹿児島県の沖永良部島（和泊）は、馬鈴薯の野菜指定産地の最南区域として知られる。当地で平均20aの圃場を150筆も抱えながら、なんと36haで馬鈴薯を単作する男がいる。皆村正樹その人は、持ち前のバイタリティーで課題の解決に努め、離島でメシが食える経営を形作ってきた。困難に立ち向かう姿は、地域に関係なく、いかなる生産者に対しても示唆に富んでいる。（※初出『ポテカル』2023年2月号、一部改変して掲載）

文・写真／永井佳史、写真／株式会社皆村農園

仁王立ち

「男前に撮ってくださいね」

これまで何百人もの人にカメラのレンズを向けてきたが、こうした自発的な言葉を聞いた記憶がない。ニューホランドとクボタのトラクターの前輪に両腕をかけ、凛とした表情からは貫禄を感じる。

写真には入っていないが、サンダル履きの足元も気にしていた。

「靴を履いてきたほうがよかったですかね？　やる気ねぇみたいな」

取材はおおむね済ませた段階であり、単なる格好つけでないことはわかっていた。記事が掲載されれば不特定多数の人の目に触れる。その人々に自分がどう映るのかまで意識してのことだったのだろう。

鹿児島県の離島である沖永良部島の農家に生まれた皆村正樹（39）は、地元の高校卒業後に実家で就農した。200人いた同級生で島に残ったのは5人だったという。いまでこそUターン組は5割に上るが、彼はわずか2%の道を選んだ。その選択に父である博幸は「申し訳なさを感じた」と当時を振り返る。

1989年に馬鈴薯の生産を1haから始めた博幸は、1996年に主に生食用でカルビーポテトとの契約栽培に乗り出す。1998年にはそれまで手がけていたサトイモや切り花を取りやめ、馬鈴薯の単作農家となった。正樹が就農するのはそれから4年後の2002年のことだ。ゴムクローラー型の小型自走式収穫機「ポテカルゴ」（ニプロ製）の導入もその年であることから、手間のかかる作業体系だったことは容易に想像がつく。ゆえに「申し訳ない」と発したのだろう。

ところが、当の本人は小さいころから農業に夢や希望を抱いていたようだ。島の図書館に所蔵されている、小学生時分の正樹の作文にはこう記されていた。

「将来じゃが芋農家になる」

その後、標準的な馬鈴薯農家ではなく、一期作で36haという、主産地の北海道でもまずあり得ない規模の経営者となるのだった。

気になったら物怖じせず本人へ直接電話

筆者が正樹を認識したのは2018年のことになる。「グラウンド ペチカ」（デストロイヤー）や「タワラマゼラン」などの馬鈴薯を突然変異育種法で育成した俵正彦の葬儀でのことだった。祭壇に飾られた供花の札名を見ていたところ、「皆村正樹」とあったのだ。どこかで見覚えがあると思いつつ、帰京して小誌の発送先リストを確認すると、やはりその名が存在した。小社が編集する馬鈴薯専



株式会社皆村農園
代表取締役社長
皆村 正樹
鹿児島県沖永良部島

みなむら・まさき　1983年、鹿児島県の離島である沖永良部島生まれ。鹿児島県立沖永良部高校卒業後、実家の馬鈴薯単作農家に就農。作期が10～4月のため、若いうちの夏場は神奈川県の江の島の海の家でアルバイトしたり、住み込みのアルバイトをしたりして汗を流した。2011年、法人化するとともに代表取締役社長に就任。2014年、グローバルギャップを取得。2017年、「かごしまの農林水産物認証制度（K-GAP）」を取得。2022～2023年にかけ、36haで馬鈴薯の単作経営を行なう。将来的には40haでの生産を目指している。



門誌『ポテカル』の読者でもあった。

「西南暖地なので青枯病がどうしても出てしまって悩んでいるとき、ポテカルか何かの記事に載っていた俵さんが『デストロイヤー』は暴れ病にすごくいいと書いていたので、作ってみたいと電話してみたんです。栽培したら確かに強い印象でした。俵さんとはそこからの縁で、長崎に行って馬鈴薯のことを教わりました。お酒も酌み交わし、1泊させてもらいましたね」

正樹の口から飛び出した生産者の名前はそれにとどまらない。東北の大規模種イモ生産者や関東の有機野菜グループの社長、北海道のメロン直売生産者など、名立たる有名人の名前が次々出てきた。

「僕はトップの人に直接電話するんです。あるところのトップには1週間おきぐらいで10回は電話しました。そうしたら自分みたいな人はいないので、逆にレクチャーしてもらえたんです。でも、さすがに『こいつ、なんなんだろう』と思ったんでしょうね。仲介の種苗会社から『トップの人に電話するのはお前くらいしかいない。もうやめてくれ。我々だって話していないのに』と忠告されました。電話するのが好きなんです。立場は関係ないですよ」

情報収集に貪欲で、気になることがあれば本人にダイレクトでコンタクトを取る。それが企業や団体であればその代表者をつかまえる。共通の知り合いを通じてとか、窓口に問い合わせるといったまどろっこいことはせず、最短ルートで迫る。

沖永良部島は鹿児島本土まで552㎞もの距離がある。これは、東京から神戸を越えた兵庫県明石市とのそれに等しい。離島というハンデも大いに影響しているのだろうが、その件でもまた経営者・皆村正樹の横顔を知ることになるのだった。

資機材は自己調達 船便を含め輸送も自ら手配

「そうか病を抑えるのに米ぬかに『ラクト・バチルス』（乳酸菌土壌改良剤）という資材を混ぜてまいています。それによってゼロではないですけど、だいぶ軽減できていますかね。いまとなってはどの畑にも100%使用しています」

ここで注目すべきは、資材の利用ではなく、その調達だ。沖永良部島にコメ農家はいない。つまり、島外から運賃をかけて仕入れていることになる。

4ページの全身写真の背景にあるニューホランドのトラクターはもともと茨城県にあった中古だ。農業機械の輸送といえばディーラーに任せるのが通例だが、自分で手配する人はどれほどいるだろうか。

「先方に見積もりを出してもらったら30万円でした。それがいつもの船会社だと23万円です。だいぶ前から相手に託したことはないですね。北海道のサークル機工やノブタ農機の選別機もそうです。結局、陸送代が高いんですよね。だから、近場の九州より関東や関西でモノを探して船で引いてくることが多いです。とはいっても、船賃がかかれば日数もかかるわけで、たまに欠航すらあります。離島でメシが食えたら、本当のプロだと思うんですよね」

正樹は地元農協とは出荷取引がないという。このような調達の最適化や上述の情報収集力は、自己完結型だからこそたどり着いた境地といえるかもしれない。不利を嘆いてばかりおらず、打開策を講じる。それが収益に直結する。

「トラクターも車も全部自分で買ってきます。そんな人はエラブには誰もいません」

出る杭は打たれるものだ。農協に馬鈴薯の出荷先を一本化するよう求められた際、カルビーポテトと手を取り合うことにした。以後3年間はいろいろあったそうだ。しかし、正樹が〝出すぎる〟こと

離島でメシが食えれば本当のプロ

で何もなくなったと意に介さない。

「アイツはそういう奴だからと認知されたんでしょう」

父親の同年代にひるまず単価交渉

経営者・正樹は2011年の農業法人の設立時に誕生した。とはいえ、実際にはそれ以前から社長然としていたようだ。

「カルビーポテトとの契約栽培は、お父さんがフィールドマンと顔見知りだったことがきっかけです。その方に対して僕が単価の交渉を務めました。お父さんがこれでいいよと納得しても、自分がダメだと思えば商談です。いま考えたら無茶苦茶ですよね。カルビーポテトとの出会いがなかったら、いまのかたちにはなっていなかったでしょう。感謝しかありません」

いまのかたちとは、600～700tの馬鈴薯を市場に3割、流通業者経由でスーパーマーケットに7割という状態を指す。強心臓に裏打ちされた行動で順風満帆に歩んできたのかと思いきや、危機を経験していた。それは、カルビーポテトとの契約が切れた2010年から数年間のことになる。すでに系統出荷は絶っており、新たな販路を開拓しなければならなかった。

電話攻勢のかいもあって翌シーズンまでには売り先を確保し、選別ラインも新調して出荷体制を整える。フレコンバッグでの仕向港着船渡し条件で青果会社に供給するのだが、イメージした単価は付かない。それならばと重量選別機を増設し、箱詰めまで対応できるようにした。

「切り替えた直後は自分で100%売らないといけない責任感でやばいなと。結構しんどかったですね。フレコン出荷で手応えをつかんだところで、箱詰めしての市場出荷というわけですけど、知名度は当然ありません。これまた大変です。そうこうしているうちに知人から『グローバルギャップ(GLOBALG.A.P.：適正な農業規範の国際基準)を取らないか』と誘われました」

背後にいたのは小売大手に卸す仲買だった。その会社はグローバルギャップの取得をサポートするだけではなく、販売先まであっ旋してくれる触れ込みだったのだ。認証には費用を毎年要すが、契約による安定出荷ができるとあって2014年から今日まで継続している。

運用にあたっては作業の手順を掲示したうえでスタッフに説明し、衛生面への意識を高める。機械や器具などの安全な取り扱いも同様だ。外部審査のほか、自主的に内部検査も実施している。

島外からの35人の〝仲間〟に支えられて

2014年の時点で作付面積は16haだった。それが2017年に22haとなり、2022年には36haにまで拡大した。収穫期間の限られる馬鈴薯である。ましてや一筆平均20aで収穫機はディガー(ニプロ製)というなか、どう作業したら面積をこなせるのか。その答えは島外からの大量のアルバイトにあった。

2005年から「ボラバイト」というサービスを利用し、初年から35人ものスタッフを雇用している。ご多分に漏れず、沖永良部の島民も高齢化しており、人材難にあえいでいたさなかだった。ボラバイトとは、農業などで人手を必要としている時期に若い世代を派遣してもらえる一方、その人たちにとって従事する仕事が人生の貴重な体験の一つとなることを目指したものだ。

沖永良部島での馬鈴薯の作期は10～4月のため、通年雇用は難しい。農閑期は、正樹と両親、妻の役員に加え、社員1人の5人で対処している。個人宅配に取り組んだこともあったが、どうもなじめず、農繁期にのみ人数を抱える結論に至った。内訳は、播種期に10人、そのまま延長もありで収穫期に35人といった具合だ。大学生が3、4割を占め、20代を中心としたフリーターで構成される。ここで役立ったのがグローバルギャップだという。

「管理手法が一本化していますので、行き当たりばったりがなくなります。以前に比べ指導しやすくなりました。販売と人材教育の両面で効果がありましたので良かったです。接し方は前向きで、とにかく褒めることを心がけています」

農場の運営にあたってはヒトが何より重要になる。広くても一筆30aという条件下では大型な農業機械は出る幕がない。サンゴ礁が隆起して形成された赤土もまた厄介だ。一般的に知られる良質な赤

土ではなく、重粘土質で乾燥すると固まる欠点がある。腐植含量も少ない。過去に北海道の収穫機メーカーがデモで訪れたものの、土砂分離がうまく行かず、10m進んで断念したことがあったそうだ。平均反収が2tということもあり、塊茎よりレンガのような土のほうが多くコンベア上を流れる。そこで活躍するのが島外からの若者たちだ。

午前中に4台のディガー部隊が最大1haを処理している間、大半のメンバーは屋内で前日の収穫分を選別する。午後は圃場へ出てイモ拾いを行なう。季節柄、30℃を超える猛烈な暑さはない。

社長である正樹は段取りに当たり、オペレーターに回ることは皆無に等しい。防除に用いるドローンも、社員にも免許を取得させることで操作から解放された。

一見すると近寄りがたそうな雰囲気の正樹だが、いざ話してみると人懐っこい。年上からはかわいがられ、年下には慕われるそんな人柄だ。

これだけの大所帯を率いるのは並大抵のことではない。腰をかがめての肉体労働は過酷の一語に尽きる。それが数カ月も続く。音を

6



▲11月中旬から季節風対策で防風ネットを設置する。沖永良部島は平地のために風当たりが強く、とくに栽培期間中の季節風は甚だしい。最大瞬間風速が15m/sを超えることもざらだ。7、8畝ごとに高さ2mの支柱を立てるとともに、ネットを張る。収穫前には撤去する。

7



▲防除はDJI社製ドローンのAGRAS T20を用いる。リライアブルフロアブルとホライズンドライフロアブルを使用し、2、3回で済ませる。2台のドローンに対してバッテリーは6台を持っている。以前は3、4台の動力噴霧器で防除していた。生産履歴の記録などはタブレット端末を利用して行なっている。

8





▶フレールモアーでの茎葉処理後、4台のディガーを駆使して午前中に塊茎を掘り起こす。天日にさらし、午後からは拾い集めに入る。容量が30ℓの堆肥袋を用い、いっぱいになったらフレコンバッグに投入する。以前はミニコンテナを使っていたが、B品の発生が問題になっていたことから変更したところ、3分の1くらいに減ったという。1月中旬から4月末までの長丁場となる。それが終わると次作用の自家採種の種イモの収穫に移る。収量は平均2t/10aと満足のいくものではなく、品質の向上を図ったうえで3t/10aを目標に据えている。

9



◀サークル機工の選別機にノブタ農機のサイザーを組み合わせたラインが二つあり、前日の収穫分を午前中に選別する。作業場の屋根には太陽光パネルを備え付けており、屋内温度が上がりにくくて作業しやすいという。サイズ別に梱包された段ボール箱は港で海上コンテナに詰め、船で鹿児島港まで運ばれる。流通業者向けに関しては沖永良部島内の2戸と共同で出荷している。卸値は1週間ごとに決め、市場相場を目安に常識の範囲内で商談する。相場が下落したときは下がった下限ではなく、ちょっとだけ上のところで面倒を見てもらっているという。高騰している場合は逆のパターンになる。なお、商系出荷で価格下落時に指定野菜価格安定対策事業が適用されないため、収入保険に加入してリスクヘッジしている。B品は加工会社へA品の半値以下で卸す。

離島でメシが食えれば本当のプロ

上げてもなんら不思議ではない。そうした状況下でも楽しく過ごしながら仕事してもらおうと、サービス業であるかのように気配りしている。その前提となるのが寮だ。2019年に3000万円を投じて新築し、全部で4棟となった。

「昼と夜の2食付きで、住み込みで働いてもらっています。3、4年前までは朝食もセットしていたんですけど、ゆっくり寝ていたいという人や朝ごはんは要らないという人もいて変更しました。調理担当の母と妻が朝5時に起きて準備するのはちょっと……という事情もありますが。特徴的なのは、自家製馬鈴薯を使ったメニューを毎食1品は提供することです。食事が一緒のこのスタイルがしっくり来ており、連帯感が生まれます」

それだけではない。休日である日曜日となれば島内観光や海水浴に出かける。そして、歓迎会をはじめとする月に一度の交流演奏会がある。

「音楽に限らないんですけど、楽器ができなければ、一発芸だったり、ダンスだったり。みんな何かしら芸を持っています。前に出るのが嫌な人は観客になってもらいます。非常に盛り上がりますね。

生　産　工　程



▲土壌診断は馬鈴薯の収穫後、毎年実施しており、地域の慣行レベルに比べ肥料は50％減、農薬は30％減で栽培している。土壌消毒は一切していない。



▲圃場によってはソルゴーを栽培して有機物を補給するとともに、土の物理性を改善する。3年前からは景観目的でヒマワリも取り入れている。スガノ農機製20インチ3連プラウで反転した際は土塊だが、1、2カ月間、放置することで崩れるという。作土が浅くてプラウ耕ができない圃場はプラソイラやスタブルカルチで対処する。トラクターは115馬力のニューホランド製TS115Aをはじめ、十数台を所有している。メンテナンスは6、7割を博幸と正樹で対応する。不可の場合は地元のディーラーに頭を下げて依頼している。



▲9月に苦土石灰や米ぬか、「ラクト・バチルス」という資材を施用したのち、ロータリーハローで2回ほど砕土・整地する。米ぬかは島外から50tを仕入れ、10a当たり約140kgを投入している。それによってそうか病の発生がゼロ近くに抑えられているという。



◀播種時期は10月中旬～12月下旬になる。種イモは、5月に収穫して冷蔵した自家採種の種イモから使い始め、当年の北海道産と続ける。栽培する品種は種イモの流通事情で変わることがある。2022年は「アローワ」「ニシユタカ」「ホッカイコガネ」「ピルカ」「メークイン」ながら、2023年は「ニシユタカ（20ha）」「ピルカ（7ha）」「ホッカイコガネ（6ha）」「アローワ（3ha）」になった。種子消毒はアグリマイシン-100を採用する。





▶自作の2条植えポテトプランターは2セットある。ホッパーの出口から1片30g程度の種イモを手で拾い、畝切り部に伝わる塩ビパイプの穴に落とす仕組みになっている。株間は25cmを目安とする。北海道産種イモは大玉が供給されることが多く、播種量は10a当たり250kg（注：購入費は6万円）になるという。なお、ディスクで覆土されるほか、この工程で施肥と整地も行なわれる。播種直後にニプロ製2畦ロータリーカルチで培土する。

妻が三線、僕がギターを弾きながら『島人ぬ宝』を歌ったりもします」

こうしたもてなしの結果だろうか、島に別れを告げる際にはそれこそ全員が泣くという。働き手として最高8回もリピートしてくれた人もいれば、結婚したカップルが何組もいる。人件費は年間1500万円にも及ぶが、彼ら彼女たちのおかげで規模拡大が実現できている。

いまや人材サービスに頼らずとも、正樹のInstagramとFacebookでの募集だけで断りを入れるほどの人が集まってくるそうだ。この好循環も彼の人柄によるところが大きいに違いない。

近隣農家からの農地の購入依頼も舞い込んでおり、将来的な目標である40haでの生産も視界は良好だといえる。



相談はパートナーである妻の美穂(写真中央右)に行なっているという。決断は自ら下す。「原料価格の上昇で、燃料や資材などすべての経費がこれまで以上にかさみます。経営へのインパクトは大です。それでも、僕の馬鈴薯づくりの挑戦はこれからも続きます」

合わせ鏡としての皆村正樹

「馬鈴薯は何十年もやっていますけど、おもしろいですね。ほんといくらでも極めたい。永井さん(筆者)、毎年来てくださいね」

これは夜の会食時の一コマである。矢継ぎ早に繰り出される質問に答えながらも自問する。再訪したら話せるネタがあるのかと。上述の〝あるところのトップ〟も、10回もの電話で嫌気が差したのではなく、じつはもう話すことがなかったのではないか。そう感じさせる正樹との濃密な1日だった。

最後に、読者に一つお願いしてキーボードをたたく手を止めたい。もし、沖永良部島の皆村正樹という人物から電話がかかってきたら応じてほしい。刺激的であると同時に、自身を見つめ直すきっかけにもなると思うから。

(敬称略)

